イワシを食っているターゲットは、波動が大きめのジグに興味を示すことが多いからね。

★底から5メートル上までリフト&フォールを繰り返す

▲▶興津沖の水深30メートルで40グラムのジグを使うとカサゴや小さなイサキが食ってきた

た名前である。漢字なんかどうだっていい。ただ庄之助船長は、数多くの根を正確に把握している。それだけで十分だ。

「高〜い根のキワから流し込んでいきます。水深は30メートルから一気に上がっていきます。底のほうに薄〜くイワシの反応がありますね。右後ろから左前の潮が0.8ノット。ちょっと流れ始めてますね。根掛かりに注意してやってみてください」

これは一例だが、庄之助式アナウンスは毎度こういった具合だ。本当に、毎度だ。釣りをしている間中、状況が変化するたびに流れるていねいなアナウンスは、丹念にして精緻だ。

口調は柔らかい。そして魚群探知機から必要な情報だけを適切に「抜粋・編集」して、知るべき状況を知らせてくれる。だからストンと耳に入ってきて、スッとイメージが湧く。

名アナウンサーによるラジオでのスポーツ実況のようなものだ。映像のあるテレビよりも、こと細かに情景が思い浮かぶ。

あとは、我われ釣り人の頑張り次第だ。たとえ、どんなに寒くても。たとえ、指がかじかんで動かなくても……。

▲海鳥が集まりベイトの気配が濃厚

厳しいコンディションでさえ笑顔の絶えない庄之助丸

釣り始めてすぐ、「んあっ」と声を上げたのはタカハシゴーだった。しっかりと竿が曲がっている。慎重に巻き上げると、小ぶりながら緋色が美しいアカハタが顔を出した。鉛色の空とのコントラストが鮮やかだ。

「60グラムのバンブルズジグTG SLJが着底した瞬間、ドン！ と食ってきた。いわゆる着ドンだったよ」

若干興奮気味だが、彼にとって最初で最後の1尾とならなければいいが……。水温が下がり、状況はタフだ。それでも魚の顔を見られるのが、SLJの面白さである。

ジグを落とした先にタイミングよく魚がいれば、着ドンで食ってくることも多い。庄之助丸が攻める興津沖の根周りでは、カサゴやアカハタに比較的この着ドンパターンが目立つ。永遠の初心者・タカハシゴーにもチャンスが訪れるというわけだ。

ヨッシーは、SLJの基本として「まずはしっかりジグを着底させること」だと言う。

「着底が分かりにくければ、無理に軽いジグを使わず、重めのジグを選んでしっかり着底させる。これがSLJのスタートラインだよ。

ここで、底がどうなっているかを詳しく教えてくれる庄之助さんのアナウンスが生きる。根が荒いなら早め・強めのサミングでブレーキをかけて根掛かりを回避するし、砂地ならあまり気にしなくても大丈夫。

いずれにしてもジグの着底と

▲アカハタを釣り上げたタカハシゴー